

「Do you know 能楽？」第七弾

～今宵は狂言づくし～

2020年1月24日実施 JGA 第一支部研修 終了レポート

研修開始1時間前に総武線が運行停止となり、定刻通り始められるか緊張が走りました。しかし、さすがガイドの皆様！それほど遅れることなく息せき切って到着されました。2020年、オリンピックまで半年を切りました。想定外の事が起きるかもしれません。思わぬプチ予行演習となりました。

独立行政法人日本芸術文化振興会 国立能楽堂様のご協力をいただき、第一部能楽講義、第二部「狂言の会」鑑賞、第三部能舞台体験という構成で36名（正会員34名、運営委員2名）が参加しました。

講師の能楽協会会員狂言師の高野和憲師が、軽妙洒脱な語り口で、現存する世界最古と言われる能楽



の歴史、舞台の構造、能と狂言の役割の呼び方の違い、狂言独特の小道具の紹介や呼び名、狂言の二大流派（大蔵流、和泉流）など、くすつとした笑いを取りながら次から次へのご教示くださいます。狂言は言葉遊び、各人違う笑いのツボを長年に亘り集約した抽象劇であり、自分の頭の中で色を付けて楽しむ水墨画のように、想像力を使って足りない部分を補いながら楽しむものであると深い言葉をいただきました。



た。本日の三番の狂言は異なる三派の競演であり、高野師も他の派（家）の演出を楽しみにされていたらしいとのことでした。

夕食は希望者が館内の食堂「向日葵」で羽衣弁当をいただきながら、能や狂言にとどまらずガイド業の話など多岐に亘りそれぞれのテーブルで盛り上がり楽しいひとときを過ごしました。

いよいよ第二部狂言鑑賞です。演目は新年の寿ぎに相応しく囃子などが入った狂言「三本の柱」（善竹忠重）・「法師ヶ母」（野村万作）・「彦一ばなし」（茂山千五郎）です。三本の柱は「3人が3本の柱を2本づつ持って帰ってくる」という任務を全うするお話。「法師ヶ母」は酔っ払いの妻探しのお話。なんと、能のパロディ仕立てです。人間国宝野村万作師の千鳥足はお見事！「彦一ばなし」はかわいい天狗のしぐさや彦一のピカピカの笑顔に福。

さて、第三部は能舞台体験です。研修生用ですが檜舞台です。白足袋に履き替え、舞台上がり説明を受けました。舞台だけでなく楽屋など隅々まで見せていただきました。能のお囃子の楽屋には火鉢はつきもの。大鼓の皮の乾燥に必須だそうです。シテが「おまーく」と声をかけるとお弟子さんが幕を竹の棒で上げていきます。実際に狂言鑑賞をして舞台裏まで見せていただき、勢い、疑問が次から次へと湧き上がります。今回は夜の公演がひけてから舞台上がらせていただきました。国立能楽堂の皆さまには夜遅くまで真摯にご対応いただき、また、引きも切らぬ質問にも丁寧にお答えくださって感謝ばかりです。

私たちがお客様を実際に能楽鑑賞にお連れする機会はあまりないかもしれませんが、能楽をご紹介しますことで、お客様が能楽にご興味を持ち観賞される機会を作ることができます。舞台芸術の話が出た時やバストークなどでいかせるよう工夫していきましょう。

